

嘗てのビルマ戦線で戦った 日本将兵を想う

— その5 —

知られざる誇り高き拉猛守備隊

高松重信・著



拉孟（ラモウ）陣地を結ぶ「恵通橋」、川は怒江（どころ）サルウィン川（Salween）



日緬ライブラリー・パダウ

PADAUK

前文 / 先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）

（一社）日本ミャンマー友好協会・副会長 高松重信

戦争とは人類が最も忌避すべき残虐な事変である。従って我々は最大限の努力をもって、その戦争を回避しなければならない。

しかしながら、世界の歴史に於いて戦火が絶えることはない。現状下に於いてはイスラエル・パレスティナ紛争、ロシア・ウクライナ戦争などと悲惨な戦いで多くの人命が失われている。また、中国と台湾、南シナ海、中近東などの地域では一触即発の危険性を孕んでいる。

プロイセンの将軍カール・フォン・クラウゼヴィッツは「戦争」を自身の著書「戦争論（Vom Kriege）」の中で次の様に定義付けている。

「戦争とは、敵を強制してわれわれの意志を遂行させるために用いられる暴力行為である」
即ち、双方が武器を有した暴力行為であるから、双方の将兵及び市民に人的損傷が必ず生ずることになる。

特に戦う将兵にとっては必ず自らの人命を投げ出す覚悟をしなければならない。つまり人間にとっては誠に苦しい状況下に於かれるから、一人一人の将兵にとっては極めて赤裸々な個人的な人間像を呈することになる。

我が国の国策により先の大戦中、遠い異国のビルマ戦線に派遣された日本将兵方々が過酷な戦いの中で、如何なる生き方を示していたかを我々日本人は知り、畏敬の念を払うと同時に、我々が今後進むべき人生観の道標にすべきと思う次第である。

他方、第二次大戦は確かに、我国はアジア諸国を中心にして、その惨禍を被らせたことにお詫びと反省をしなければならない。二度と我々日本人は過ちを犯してはならないことを肝に銘じ、今後の我が国の若人に申し伝えねばならない。

しかし、自虐的な書物及び報道によって、第二次大戦に対して日本が果たした世界史的な役割も、また見失ってはならない。私は、平和共存を前提にして、いま、この旗を建てるため、我々日本人が如何なる働きをしたかを聞かされるならば、我が民族は必ずや、再び、失われた自信を取戻し、胸を張って、新しい人類の理想のために前進するのではないかと思う。

当一般社団法人日本ミャンマー友好協会は、1970年、ビルマ戦線から帰国された方々が設立した団体である。先の大戦中、ビルマには約30万人の日本将兵方々が派遣され、遠い彼の地で日本の両親兄弟及び人々の為に渾身の力を絞って勇戦されたが、戦い利にあらず、その内の約18万人の方々が戦病死され、未だその遺骨の多くは帰還されていない。我々は彼らに対して感謝もせず、慰霊もせず、ただ忘れるばかりの日本人であって良いのだろうかと思うことしばしばである。

この意味も含めて、日本将兵方々が、あの過酷なビルマ戦線で如何に戦われたかを我々は知り、それらの人々の遺功に報じなければならないと思う次第です。

以上の観点で、（一社）日本ミャンマー友好協会の「日緬ライブラリー・パダウ」に先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）と題して、拙文を登録させて頂いた次第である。

登録させて頂いた拙文は戦記的な興味本位でなく、悲惨な戦場で戦った日本将兵の本義（人生観）と言う角度で記述致している。読者の方々に於かれては是非とも一読して頂き、些少とも御参考に為りますれば、幸甚に存じます。



ミャンマー連邦共和国



先の大戦中、中華民国（現台湾）の蒋介石総統《敵軍（中国の国民党）の総司令官》は、日中が戦っている最中にビルマ北辺（現ミャンマー）拉孟（らもう）において、全員が玉砕するまで戦った日本軍の勇戦を讃えて、1944年6月（昭和19年）「東洋道徳の範とせよ」と二回にわたって全軍に布告した。何故に我が国の拉孟守備隊を尊敬し、規範とにせよと自軍に通達したのであろうか。

2011年末からミャンマーが民主化に舵を切って以来、我が国は諸外国と同様にミャンマーをアジア最後のフロンティアと位置づけ、官民挙げて進出している。このように多くの日本人がミャンマーを往来する中であって、嘗てのビルマ北辺の地を守るために、遠く中国・雲南の果ての拉孟で数多い我が国将兵各位が戦い未だ帰還せず、この地に眠っている。我々は彼らに対して感謝もせず、慰霊もせず、ただ忘れるばかりの日本人であって良いのだろうかと思うことしばしばである。

この観点で、今もって、人知れず、彼の地で眠り我が国の安寧と発展を願い勇戦した「拉孟守備隊」の実話を記述致させて頂いた次第である。

初めに

【日本人の倫理観（精神）：「名こそ惜しけれ」「公に奉ずる」】

司馬遼太郎さんは日本人の倫理感（精神）を次のように話されている。日本の近代史、幕末から明治時代は世界史の中でも例をみないほど特異に発展し、それがアジアで唯一の独立国を堅持したと言って差支えがない。この原因が我々日本人の倫理観である「名こそ惜しかれ」「公に奉ずる」に起因している。また、この倫理観が、世界でも殆ど類例がない。戦後の驚異的な復興、阪神淡路震災および東日本大震災時に見られた節度ある行動などにも起因していると述べておられていた。

司馬さんは、これら日本人の倫理観の醸成を次のように説明されている。平安時代の公家による律令政治による重税のために百姓などは高知の檜原地区などの人里離れたところに逃避し土地を開墾し生活を営んだ。これらの人々の間で武士少数団が各個に存立していった。これが武士時代の幕開けとなり、12世紀後半に鎌倉幕府が出現した。幕府は開拓した土地を武士達に与えた。（安堵状）

この結果、世話になった人に恩義を感じ「名こそ惜しけれ」の社会規範が生まれた。鎌倉武士が蒙古来襲時、自国を守る戦いに一片の報酬も欲することなく、命を賭して祖国防衛に勇戦したのもこれに起因していると判断される。

その後の戦国時代1496年に北条早雲が小田原城に所領を構築し、領国の守備に関して農民に徴兵を募るために、指導者が模範を示す21か条の戒律書を出し、領国民の

生活を保障した。この政策が「名こそ惜しけれ」から国に尽す「公に奉ずる」となり、その精神が武士階級は言うに及ばず当時の人々の規範となり、それが社会の倫理となった。

この倫理感が我々日本人のDNAとなり「拉孟守備隊将兵」にも受継がれていたのではないかと思っている次第である。

旧日本軍のビルマ（現ミャンマー）進行に対する作戦は一般的に言って間違っていた。例えば、インパール作戦など自然の摂理を無視した作戦も少なからずみられた。このためにビルマへ進軍した旧日本軍将兵30万人の内その2／3、約18万人の将兵が苦戦困窮の中で勇戦されたが、痛ましい最期を遂げられている。この事実を知るにつけ一日本人として落涙を禁じ得ない。



小田原城

この様な悲惨な戦いの中にあっても、ビルマと国境を接した中国雲南省の拉猛（らもう）の地で、身の犠牲を顧みず祖国のために最後まで金光守備隊長以下一糸乱れず戦い抜き、敵軍に大打撃を与えた「拉猛守備隊」の勇敢にして沈着な戦いぶりに、敵将であった蒋介石からしても「東洋道徳の規範にせよ」と逆に評価されたのである。

らもう 拉孟陣地の地理的要衝

先の大戦中、我が国がビルマ（現ミャンマー）に進駐した目的は次の三つであった。

- (1) 我が国は当時、中国と戦火を交えており、大戦以前から米英などはビルマ・ラングーン（現ヤンゴン）からマンダレーを通り、昆明を經由して国民党軍（蒋介石）の重慶へ物資を搬送していた。この援蒋（えんしょう）ルート遮断のためにビルマへ進軍した。
- (2) ビルマを英国の植民地から解放し、大東亜共栄圏確立を確立させ、我が国とアジア諸国の共生を図り、我が国将来の存立をより確かにする。

※大東亜共栄圏：Greater East Asia Co-prosperity Sphere＝植民地を解放し、共存共栄の国際秩序建設。

- (3) 当時の我国の絶対防衛圏の西端をビルマにおく。

日本軍とビルマ独立義勇軍(B. I. A)はビルマに於ける英・中軍を駆逐し旧来の支援ルートを遮断したので、彼らはインド・アッサム（インパール）から昆明への援蒋ルートを新たに建設しようとしていた。そこで日本軍はこの要衝である拉猛に陣地を造り、このルートも遮断したのである。

※BIA=Burma Independent Army =ビルマ独立義勇軍(日・緬合同の義勇軍)
拉猛は中国名を松山と言って、1942年（昭和17）5月5日、旧第56師団の坂口支隊が同地を占領してから、一躍その名を知られるようになった。



恵通橋

拉孟（らもう）は中国南西部の雲南省の南北に貫流する大河・怒江の西岸に位置し、中国雲南省の主要都市・昆明（くんみん）とインド、ビルマ北部を結ぶ要衝であり、

眼下に恵通(けいとう)橋を見下ろす海拔2,000メートル、怒江との高さ差は約1,000メートルの山上にあった。

※怒江(どこう)は、ミャンマーではサルウィン川(Salween)と呼ばれている。

東は怒江の大渓谷、北方と南方は水無川と拉猛川の深い渓谷に挟まれている。

つまり、西方のみが公路に通じている人馬の通行も至難な天然の要害の地であった。

中国軍は拉猛を攻略しないと欧米からインドを介しての蒋援ルートを開通できないし、日本軍にとってもこのルート遮断のために拉猛の確保は絶対に必要で、如何なる犠牲を払っても同地を占領確保しなければならなかった。ここで両軍の死闘が発生したのである。

金光恵二郎 守備隊長(少佐)

金光少佐は1896年(明治29)3月、岡山県和気郡備前町の農家に生まれた。

貧農の家に育ったが、大変に勉学好きな少年であり、近所の人から“二宮金次郎”と呼ばれていた。朝は登校前に畑で牛に食べさせる草を刈り、学校から帰宅すると肥桶をかつぎ、鍬をふるった。また弟や妹の面倒をみていた。働いていないときは教科書を持ち勉学していた。成績は飛びぬけていたが、家が貧しいので高等小学校を卒業すると上級学校へ進学せず、家業の百姓を手伝っていた。やがて徴兵検査を受け、現役兵として我が故郷の姫路砲兵連隊に入隊した。

連隊でも金光二等兵は真面目に勤め伍長、軍曹と進級し、ついに、甲種中等学校卒業生(旧制中学校)者に限られていた陸軍士官学校の入学試験を受けた。小学校だけの学歴者が5番の成績で合格したのである。

士官学校卒業後、少尉に任官し、満州事変、日中事変で大陸を転戦し、1941年(昭和16)3月に少佐に進級した。

金光少佐は豪放さもなければ、才気ばしったところもない。拉猛守備隊長になってからも、北九州の荒くれ将兵で広東作戦、南京攻略、杭州湾敵前上陸を戦い抜いた歴戦の猛者ぞろいの将兵に対して、歩兵でなく砲兵科出身の老少佐は部下に対して虚勢も張らず、御機嫌をとるような卑屈さも見せず、誠実な態度で部下に接した。拉孟・陣地構築の重労働でも、先頭にたって丸太を担ぎ、鋸を引き、モッコを担いだ。食事も隊長室へ運ばせず、兵と一緒に土囊の上で握り飯を食べた。

作業中も敵襲があった。爆撃で負傷した兵を見ると「さあ、俺の背中におぶさるんだ」「隊長殿、それでは自分が困ります」「遠慮している場合か、早くおぶさるん

だ」負傷兵は、金光の背中でポロポロ涙をこぼした。このような中で拉猛守備隊の将兵は隊長を中心に一糸乱れず最後まで戦い抜いた。



金光少佐

拉猛陣地構築

当時、陣地構築に必要な資材を殆ど日本国内から搬送できなかったが、不平不満を言うことなく、創意工夫を凝らし砲爆撃にも堪え相互に連携し砲銃撃ができ、且つ、連絡も可能な交通壕を持つ堅固で近代的な複合陣地を造り上げたのである。

この拉猛陣地守備隊の戦いの対敵準備は用意周到でインパール作戦時の準備に比較すると戦術的にも物理的にも雲泥の差があった。



拉猛の複合陣地

工事には必要なセメントはなかったので鹵獲した援蔣物質の鉄板や、空ドラム缶に土をつめて代用し、掩蔽用の木材は陣地付近の谷間から松の木（直径40cm内外）を切出し、これを丸太のまま使用した。陣地は遠征軍の重迫撃砲、山砲および航空機による爆撃に耐えうるように、掩体のある銃座や砲座、軽機関銃まで全部掩体壕の中に収容し、火砲は掩砲所（砲の隠れるところ）、射撃掩体（穴から射撃するところ）と別々に構築した。陣地前方には幅4から8mの鉄条網を少なくとも一線張り巡らした。陣地の構築は概ね1942年（昭和17）末までに既成した。

1943年（昭和18）になると拉猛陣地の砲撃陣地を強化するとともに、直接対岸を射撃できるための予備陣地や観測所を増設し、砲兵陣地は交通壕を良好にし、大隊砲は交通壕内を移動できるようにし、更に要点の鉄条網を強化した。

1943年中期以降、敵軍の反攻準備が進展すると、拉猛は最小限に兵力をもって空陸からの敵猛攻撃に長期間これを固守し、師団主力の作戦を容易にするように命じられた。

重要な部署は直撃弾にも耐えられる程度に強化され、通信線は地下に埋設した。火砲は爆撃に対しても更に安全な掩蔽部に収納し、砲側には同程度の弾薬庫を新設した。弾薬は百日分の戦闘を目標として集積し、また食料も百日分を保管した。

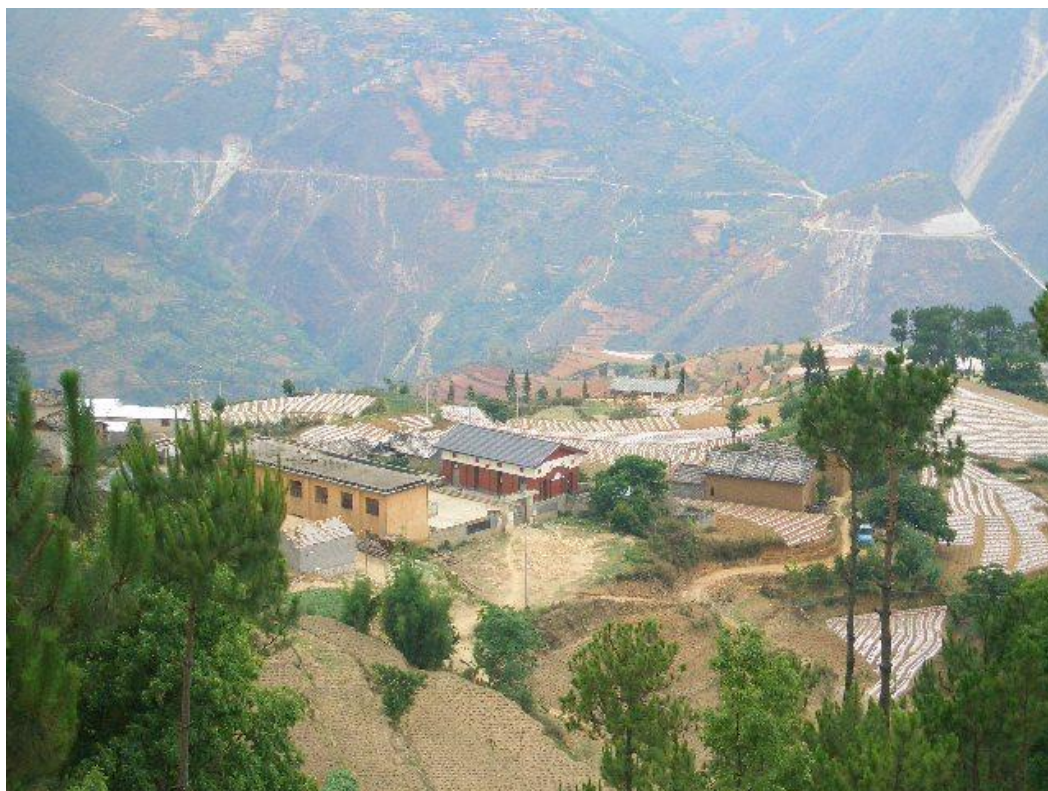


拉猛の交通壕跡

陣地の福利厚生

陣地守備で最も苦心したのは水の取得であった。占領当初は鎮安街から給水車で水を補給していたが、防疫給水部の活躍により、本道陣地と崖陣地の中間谷間に良質の水源地を発見した。自動車エンジンを利用して揚水ポンプを作り、1944年（昭和19）首までに鉄管による簡易水道を完成して、各陣地に給水した。また、籠城する場合に備えて、援蔣物質を奪取した鉄板で安全な場所に貯水槽を造り、日光を遮断して貯水した。水は日光にあてないと二から三ヶ月腐敗しなかった。

1943年（昭和18）からは自給自足の方針で、陣地付近に畑を作り、味噌、豆腐も自家製造し、木炭も自ら焼いた。馬糧も乾燥草を付近の住民に教え造らせ、陣地内に備蓄した。



現在の拉猛陣地跡の一つ

建築勤務隊の努力により、健康に良い兵舎もでき、守兵は部屋内に寝ることができた。また、恵通橋付近に捨てられた英・中軍の自動車400両から、発電装置を取り外して修理し、約6,000個の電球を点灯することもできた。軍属により酒保（売店）を開設し、まんじゅう、ぜんざい、餅菓子なども販売されるようになった。

拉猛は遠く人里を離れていたもので、憩いの場がない最前線であり、将兵は連日の陣地構築のための穴掘りなどが日課で、荒涼たる生活の連続でストレスがたまる一方

であった。そこで、金光隊長の計らいで娯楽所も開設されていた。
こうして、拉猛は小規模ながら、無人山上の一角に文化村と言うべき？山村が出現し、将兵は束の間の平和を楽しんでいた。

両軍の配備兵力

当初、拉孟守備隊の主力である歩兵第113連隊は、2,800名ほどいた。ところが3か月前に拉孟北方に現れた敵軍のために兵力を割かなければならなかったため、雲南遠征軍が包囲したときにはその半分にも満たなかったのである。そのときの守備隊の陣容は次のとおりである。

日本軍（拉猛守備隊）

- ・歩兵第113連隊の一部 400名（熊本）
- ・野砲兵第56連隊第3大隊 380名（久留米）
- ・輜重隊第16連隊第1中隊の一部 60名
- ・第56師団衛生隊第3中隊 100名
- ・第56師団防疫給水班の一部 40名
- ・前線にて負傷した兵 300名

合計：1,280名

但し、負傷した兵を除くと、まともに戦える戦闘員は実質1,000名に満たなかった。

[火 器] 10センチ榴弾砲8門、山砲12門、速射砲2門 — 合計：22門

[航空機] 戦闘機による攻撃（銃撃）数回のみ支援

中国軍（国民党軍）

- ・第6軍 15,900名
- ・第8軍 25,200名

合計：41,100名

[火 器] 15センチ榴弾砲4門、12榴17砲・速射砲12門、
迫撃砲100門、重砲24門 — 合計：157門

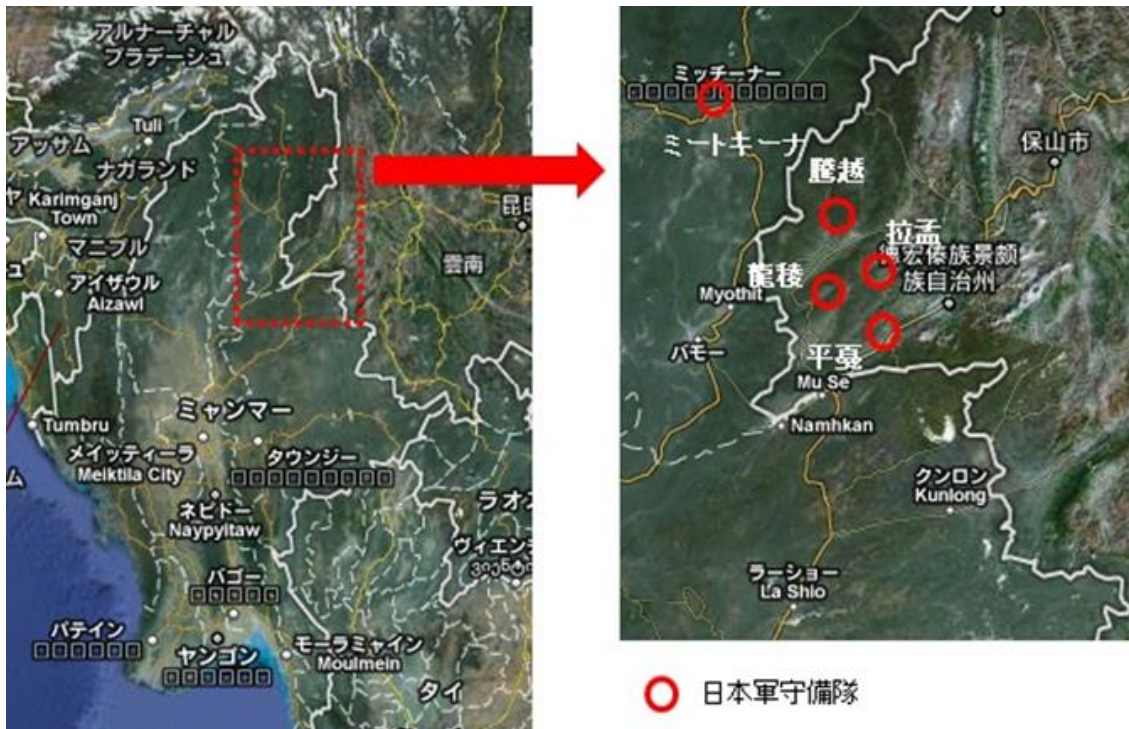
[航空機] 爆撃機数十機による常時爆撃。戦闘機による銃撃

兵力比較：1対32、火力：1対7、航空機0対数十機

概略の兵力比は1対50と言って過言ではない。

● 『反攻中国軍』

北ビルマの奪回を企図した中国軍（国民党軍）は蒋介石総統の信任が厚い衛立煌大將を総司令官に任命し、総兵力は約20万人の大軍を用意した。総参謀長に日本軍と戦闘経験が豊富な米軍のスチルウェル中將がすわりその辣腕ぶりを発揮することになる。



彼は蒋介石総統に次の事項を進言した。「十万の中国兵をインドに運び、米式武装の訓練をほどこし、近代戦を遂行できるようにしなければ、日本軍を撃破できない。このために無能な指揮官を更迭し、優秀な指揮官を選び運用指揮を与えるべきであると…」結局、彼の意見が了解され、英国軍の協力もあって、インドのカルカッタ（コルカタ）西方のランガールで幹部将校1,500人を含む十数万人の訓練を行った。これらの中国軍は全て米国軍の装備をよって近代化され、従来の中国軍とは全く面目を一新した最強軍であり、拉猛がこうした敵の重圧を一挙にうけることになった。

● 『拉猛守備隊』

1944年5月11日、雲南遠征軍の攻勢開始とともに、拉猛守備隊長松井大佐は歩兵第113連隊の軍旗を残して紅木樹訪緬に出撃し、また歩兵第弐大隊長原田少佐も部下を率いて平戛（へいゆ）方面に出撃した。これらの部隊は敵軍との戦闘に終始せざるをえなかったため最後まで拉猛へ復帰できなかった。結局、雲南遠征軍が拉孟を包囲したとき、野砲兵第56連隊第3大隊長の金光恵二郎少佐が守備隊長となり、同

大隊を基幹として第113連隊の残置兵力を合した部隊、負傷兵を含んだ1,280名が、拉孟守備隊として防衛の任務に就くことになった。



進軍中の日本将兵

戦闘概要

以下に1944年6月2日～9月7日の約90日間に亘る拉孟守備隊の勇敢にして気高い戦いを紹介する。

中国軍は、1944年5月頃から怒江以東のビルマ公路の補修を始め、連日弾薬、資材、食糧などの集積に努めていた。6月1日、怒江東岸の鉢巻山頂上に雲南遠征軍（以下「遠征軍」と略称）の兵士が現れ、悠々と工事を始めた。翌日、鉢巻山に進出した数門の重砲射撃によって、遠征軍の攻撃が開始された。守備隊の砲兵もまた応戦し、怒江峡谷一円は彼我の砲声に包まれた。

● 『第一次攻防戦』

当時の拉孟守備隊兵力は、前述したように主力は出撃した後であり、その残置部隊と野砲兵大隊を合わせて人員約1,280名（戦傷患者約300名）、火砲22門に過ぎなかった。

1944年（昭和19）6月2日の午後、敵、雲南遠征軍は第一回の総攻撃を仕掛けてきた。

凄まじい砲爆撃が、一斉に開始された。間断なく撃ち込まれる巨弾は、大地を揺るがした。山の形までが変ってしまうほどの猛烈な砲撃であった。

しかし守備隊員が必死で作った陣地は、頑強であって崩れなかった。守備隊の将兵は、陣地の中に身を隠し、息を殺して逆襲のチャンスを待った。

砲兵将校である金光隊長は、限られた火力しかない守備隊がむやみに撃ち返して、虎の子の砲の位置を敵に教える愚策と無為な砲弾の無駄、を知っていた。

翌朝も再び敵の砲撃が開始される。あらゆる砲種の砲弾が、唸りをあげて落ちてきます。爆風が土砂を、鉄片を、木片を巻き上げ、硝煙が舞い、昼間だというのに薄暗く、視界さえ利かない。けれど相変わらず、金光隊長は動かない。撃たれっ放しです。やられっばなしです。それでも隊長は動かない。

翌、6月4日の朝、またもや敵の砲撃が開始されます。ただ、この日は、いつもと様子が違った。敵の観測用飛行機が陣地上空を低空で飛ぶ。守備隊の陣形、兵の配置などを無線で報告しているようです。今まで、むやみやたらな砲撃だったものが、目標物に対する狙い撃ちに変った。

これを見た金光隊長は、敵の歩兵部隊の侵入が近いことを予期した。そして全将兵に戦闘準備を命じた。金光隊長の予想は的中した。



歩哨に立つ日本軍兵士

先鋒を務める、李士奇師長が率いる新編二八師の歩兵一個連隊3,000人が、沈黙したまま反抗しない日本軍を侮って、上松林陣地に向け、喚声をあげて押し寄せてきたのです。

金光少佐がじっと待ち続けていたのは、まさに、このときでした。彼の命令一下、掩体壕（砲撃から身を守るための壕）に潜んでいた守備隊の虎の子の砲が、地上へにゅっと顔を出し、そして一斉射撃を開始した。

それまでじっと耐え忍んでいた。日本の砲撃は、まるでそれまでの鬱憤を、激情のままにぶつけるかのように猛射した。

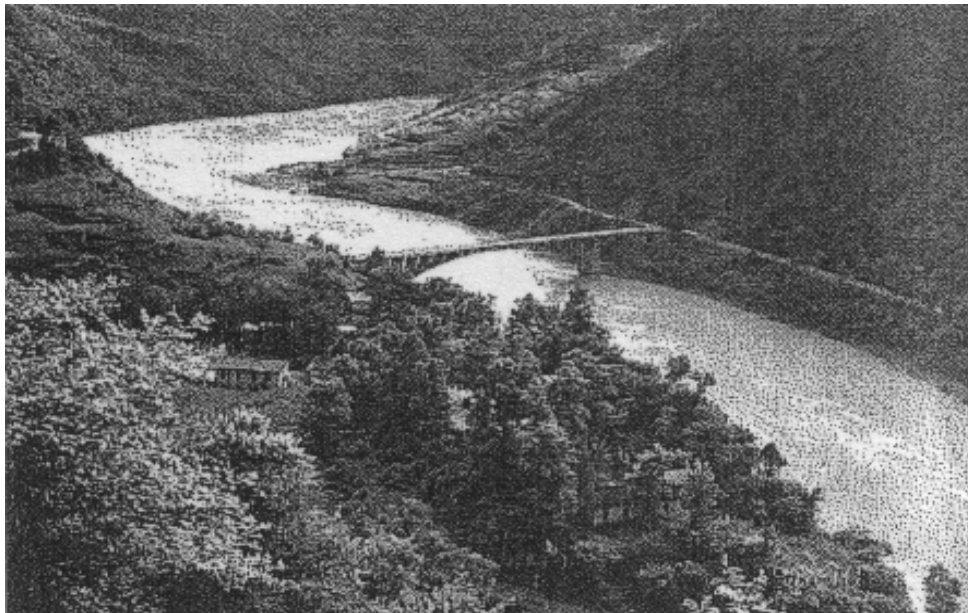
しかも鍛え抜かれた一発必中の猛射であった。狙う、撃つ、密集して押し寄せる敵兵は、次々になぎ倒され、大混乱に陥る。

敵が逃げ回った。砲撃をくぐり抜けて陣地内に迫った敵兵には、歩兵が小銃弾の連射を浴びせる。あるいは手榴弾を見舞い、撃破する。

それをも突破し肉薄して来た敵兵には、抜刀あるいは銃剣をふるった我が国の歩兵が次々と襲いかかった。

日本帝国陸軍中にその名を知られた、九州福岡の「龍兵団」の精兵たちは誠に強かった。守備隊の熾烈な猛反撃に敵一個連隊は、またたく間に壊滅してしまいます。残兵は遁走した。そして敵が敗走したのを見届けるや、守備隊の砲をまた忽然と掩体壕に隠した。

6月7日、三日前に手痛い敗北を喫した李士奇師長は、今度こそと、ばかり自ら新編二八師の主力の7,000人を率いて、総攻撃をしかけてきた。新たな目標は、守備隊の本道陣地であった。



恵通橋の右手山が拉孟陣地

しかし守備隊の反撃はまたしても彼らを上回り、激闘数時間、ついに数倍する敵を粉碎し、拉孟守備隊の壮絶な反抗の前に精鋭新編二八師団7,000名の大軍は、殲滅され、敵の司令官である李士奇師長は戦死した。こうして緒戦は守備隊の完勝とな

った。

6月14日、先に壊滅した新編二八師団のあとを受け新編三九師団第百十七団が、拉孟(らもう)陣地の真北にある松山、横股陣地を攻略すべく、猛攻を仕掛けてきた。金光隊長は、ここでも頭上雨あられと降り注ぐ猛爆をじっと耐え、敵の大軍団が防御線ぎりぎりにまで迫ったのを見届けるや、一斉に砲撃の火蓋を切った。一糸乱れぬ正確な集中砲火に敵兵が斃れる。逃走する。それでも立ち向かってくる敵兵に対しては、守備隊歩兵が勇躍突撃して阿修羅の如く白兵戦を闘う。敵味方が入り乱れ、近接戦闘を繰り返すのが「白兵戦」です。この「白兵戦」は、古来より日本軍が得意とする戦術である新編三九師第百十七団は予想以上の大打撃を蒙り、またしても敗退を余儀なくされた。

ここに至って雲南遠征軍は、拉孟陣地に立てこもる、実数わずか一個大隊程度、吹けば飛ぶような日本軍守備隊の、信じがたい闘志・恐るべき戦闘力をいやというほど思い知らされた。

● 『第二次攻防戦』

7月4日から第2次総攻撃を開始、幽鬼か、鬼神の集団か？

ここで雲南遠征軍は、とうとう、国民党主席蒋介石直系の李密師長率いる最精鋭師団、荣誉第一師を前面に押し出してきた。荣誉第一師は、米軍装備で、米軍に鍛え上げられた最新鋭装備、国民党最強の軍団であった。

荣誉第一師は、日本兵が話には聞いていても、見たことのなかった新兵器、ロケット砲を投入してきた。その威力は凄まじい。

さらに、ロケット砲による攻撃をやり過ぎたため壕に潜っていると、敵は火炎放射器を使い、壕の中の守備兵を焼き殺そうとする。膨大な鉄量の爆弾を叩き込み、続いて大規模な強襲をかける。この波状攻撃は11日間も続いた。

そのたびに守備隊も必死に抵抗し、一進一退の攻防が続いた。そして比較にならぬ寡兵でありながら、日本軍守備隊は荣誉第一師の総力を挙げた猛攻撃を、またもや凌ぎ切ってしまった。

蒋介石自慢の荣誉第一師も、新編二十八師、新編三十九師にも劣らぬ犠牲を払いながら、拉孟陣地の一角すら奪うことができなかった。

日本軍の堅塁も傷み、崩れている。援軍も補給も許していない。武器・弾薬・水・食糧も、もう底をついているはずだ。

彼らみな疲れきっており。戦死者、負傷者も少なくないはずである。拉孟(らもう)の日本軍守備隊は、もはや半身不随となってもいるはずなのに、何故、破ることができないのか。彼ら日本兵は人間なのか？幽鬼か、鬼神の集団か？

雲南遠征軍は、将軍から兵卒に至るまで、対峙する日本兵に戦慄し、恐怖を覚えは

じめた。



ビルマ駐留の日本兵

● 『第三次攻防戦』

遠征軍の第3次総攻撃は、7月20日に開始され、新鋭の第82師、第102師は、主力を挙げて終日猛攻撃を加えた。陣地には、1日7,000～8,000発もの砲爆撃が叩き込まれた。それに呼応して敵攻撃部隊が陣前に肉薄し、手榴弾を投げる。守兵はそれを壕外に投げ返す。遠征軍の部隊は入れ代わり立ち代わり近接を試み、突撃支援射撃に続いて陣内に突入し、白兵戦が始まる。この様に壕内での戦闘は熾烈をきわめた。

7月25日頃の守備隊の兵力は、約300名に減少した。第113連隊長松井大佐は7月20日、最悪の場合は軍旗を奉焼するように電報で命じた。また、第56師団長松山中将は、9月初頭に実施される反撃作戦の計画に基づき、全般の関係から9月上旬まで拉孟を死守するよう命令した。

しかし守備隊長の金光少佐としては、現有戦力と弾薬・食料の関係から、それまで拉孟を確保する自信はなかったらしい。即ち砲兵弾薬はそれぞれの砲に自決用の最後の1発を残して既に無く、歩兵弾薬は著しく欠乏し、食糧も7月下旬倉庫を焼かれて、8月以降は乾パン一袋を2日に食い延ばさざるを得ない状況であった。

金光隊長がこのころ司令部宛に打った報告電文がある。

「今までの戦死250名、負傷450名。片手、片足、片眼の傷兵は皆第一線にありて戦闘中。士気極めて旺盛につきご安心を乞う」

● 『第四次攻防戦』

遠征軍は、前進陣地攻略の余勢を駆って8月7日、第4次総攻撃を開始した。この頃守備隊の兵員で健康な者は、200余名に減っていた。金光少佐は、「私の最も痛手とする敵の火砲を破壊して、守備隊の士気を鼓舞しよう」と、4名1組の挺進破壊班を7個編成した。

8月8日、9日の両日、中国の民間人に変装した破壊班は、夜暗に乗じて遠征軍の包囲をすり抜け、10日夜、敵火砲5門その他を破壊した上、自らは戦死2名を出したのみで、他は12日無事に帰還した。

8月6日と12日、守備隊は航空機十数機による弾薬の空中投下を受けた。その模様は、当時の電文によると次のようであった。

《味方航空部隊からの支援》

斯くも悲惨な状況下で、これら以下の電文は特記に値する。即ち、人知を超え、後世に残すべき友愛である。守備兵各位は物資弾薬窮乏の中、来援機の安全を心配した仁将と言っても過言ではない。

「今日も空投を感謝す。手榴弾100発、小銃弾2,000発受領。将兵は1発1発の手榴弾に合掌して感謝し、攻め寄せる敵を粉碎しあり」

「我が飛行隊が勇敢なる低空飛行を実施し、これが為敵火を被るは、守備隊将兵の真に心痛に堪えざるところなり。余り無理なきようお願いす」と…。



ビルマのトンゲ-南飛行場から、離陸寸前の我が軍の隼戦闘機

● 陸軍航空隊 小林中尉の手記

7月24日、実際に拉孟陣地への空輸を担当した第23軍配属飛行班長小林憲一中尉は手記に以下を記述している。

この日、軍偵察機3機と隼戦闘機12機を一団として、50キロの断薬筒を各軍偵に2個、隼に各1個、計18個吊し、空輸した。15機は、一団となって飛び続け、拉孟（らもう）を目指した。

「松山陣地から兵隊が飛び出してきた。上半身裸体の皮膚は赤土色。T型布板を敷くため、一生懸命に動いている。スコールの後でもあり、ベタベタになって布板の設置に懸命の姿を見て、私は心から手を合わせ拝みたい気持ちに駆られた」そして、友軍機の爆音を聞いて二人、三人と壕を飛び出してきた兵隊達の言いようのない感激の表情に、小林中尉の心はえぐられた。兵士たちは、一心に、手をちぎれんばかりに振り、声を上げ、感謝している。



ビルマの上空を飛翔する加藤隼戦闘機隊

小林中尉の眼からは、熱いものが溢れ出て視界はかすみ、手袋をぬいでいくら眼をこすっても眼が見えなくなったそうだ。小林機は、低空から2個の断薬筒を無事投下した。

そして小林中尉は、涙をぬぐった眼でしっかりと、この何分か、何十分後かに戦死しているかもしれない戦友の顔を刻み込もうと、飛行機から身を乗り出すようにするのだけれど、後から後から溢れるもので眼はかすみ、どうにもならなかったそうであった。

激情に駆られた小林中尉は、断薬筒を投下後直ちに戦場を離脱すべしとの軍命令にもかかわらず、敵高射砲の弾幕をくぐって急降下します。そして意地の銃弾を、猛

然と敵陣地に向け叩き込んだ。

敵弾が愛機の機体を貫き、自らの体もかすめた。

それでも小林中尉は、まなじりを決して、弾倉が空になるまで、あらん限りの銃弾を撃ち続けたと…。

《敵軍の猛攻と拉孟守備隊の最後》

敵軍の8月19日から始まった攻撃は、航空機を始め、あらゆる砲火を集中して陣地要部を破壊し、翌20日も砲撃を続行しつつ、地中3ヶ所から陣地を爆破した。同時に敵軍の突撃が開始され、守兵は白刃を振るって奮戦したが、午後、ついに関山陣地は奪取された。

金光少佐は、各地区から兵員を抽出して1個中隊を編成し、関山陣地を奪回すべく20日夜、逆襲させた。この夜襲は一旦は成功したものの、再び奪取された。22日未明、逆襲が再興されてまたも関山陣地を回復したが、天明とともに実施された敵軍の砲撃によって守兵に死傷続出し、金光少佐も撤退を命じざるを得なかった。

この頃第33軍（第56師団が属する上級部隊）は、遠征軍に対する総反攻を準備中であり、攻撃開始は9月3日の予定で、9月10日頃までには当面の敵を撃破して、拉孟付近に進出することになっていた。守備隊はこの日を唯一最大の希望として、僅かに生き残った100名余りの将兵は戦い続けたが、8月29日、遠征軍の攻撃で拉孟の陣地中央部は完全に制圧され、南北に分断されてしまった。

9月5日、拉孟最期の時も迫りつつあると判断した金光守備隊長は、師団主力に決別の電文を打った。



攻撃を受ける恵通橋付近

「通信の途絶を顧慮して、予め状況を申し上げたし。…周囲の状況急迫し此までの戦況報告の如く全員弾薬食糧欠乏し、如何とも致し難く最後の時迫る。将兵一同死生を超越し命令を厳守確行、全力を揮ってよく勇戦し死守敢闘せるも、小官の指揮拙劣と無力の為御期待に沿うまで死守し得ず。まことに申し訳なし。謹みて聖寿の無窮、皇運の隆昌と兵団長閣下はじめ御一同の御武運長久を祈る」

金光少佐は重要書類を焼却し、無線機を破壊してさらに徹底抗戦を図ったが、9月6日早朝から再び猛攻を受け、特に迫撃砲の集中火によって多数の者が死傷した。17時頃、迫撃砲弾の破片が金光少佐の腹部と大腿部を粉砕した。

こうして拉孟に夕闇迫る頃、拉孟守備隊長、金光恵次郎少佐は、壮烈な戦死を遂げたのである。

金光少佐の死後、第113連隊副官、真鍋邦人大尉が代わって全般の指揮をとった。いよいよ守備隊の命運も窮まり、玉砕も時間の問題と覚悟された。

明くれば9月7日、真鍋大尉は軍旗を奉焼し、また木下中尉以下3名を、報告の為陣地から脱出させた。陣内には100日の死闘を物語るかの如く、死屍累々たる中に負傷者が呻いていた。守兵のうち無傷の者は皆無に近く、全兵力は約80名であった。この日も早朝から遠征軍の砲撃が陣地に注がれた。正午を過ぎ攻撃はますます激しさを加え、守備隊の生存者が拠る最後の陣地は、僅か150メートル四方に過ぎなかった。

夕方、刀折れ矢尽きた真鍋大尉以下50余名は、ついに敵中に突入して全員玉砕した。かくして9月7日18時頃、拉孟一帯の銃砲声は止んだ。

雲南遠征軍が拉孟陣地攻撃に投入した兵力は、総計5個師約41,100名、火砲157門に及んだ。守備隊は航空機も入れると約50倍もの敵に包囲され、死闘を続けたのだった。

後日談

この戦いには後日談がある。まず、金光大佐（玉砕後2階級特進）の遺命により拉孟を脱出した木下中尉達であるが、彼らは敵中を巧みに潜行し、9月15日、辛うじて第56師団の前線に辿り着き、戦闘の様相を報告した。

重傷の兵が片手片足で野戦病院を這い出して第一線につく有様、空中投下された手榴弾に手を合わせ、一発必中の威力を祈願する場面、弾薬が尽きて敵陣に盗みに行く者、取り残された邦人女性約20名が臨時の看護婦となり、弾運びに、傷病兵の看護に、または炊事にと健気に働く姿など、語る者も聞く者も、ただ涙あるばかりであった。

さらに木下中尉は、真鍋少佐（玉砕後特進）の手紙を松井連隊長に渡したが、それには

「拉孟の将兵は固く軍旗を守り、連隊長殿の帰られることを信じ、最後の一兵まで血戦を続けます。小雀はチューチューと鳴いて、親雀の帰りを待っています。」とあった。

松井少将（8月1日進級）も、部下を救い得なかった無念の思いで、暫し悲憤の落涙を禁ずることができなかったという。

双方両軍の損害

日 本 戦死 1,270名

中華民国 戦死 約4,000名 負傷 約7,000名

両軍の勝敗を将兵の損害から比較すると、全滅したとはいえ拉孟守備隊は50対1なる僅少な戦力ではあったが、明らかに蒋介石旗下の敵軍に勝利している。

蒋介石の通達

9月9日、中華民国総統の蒋介石が、部下将兵に与えた訓示である。これこそは、敵側が如何に拉孟守備隊の勇戦に苦しめられたかを明確に示す証拠であり、蒋介石から拉孟の将兵に手向けた逆感状とも言えるであろう。

「松山陣地（拉孟陣地と同義）は9月7日、我が軍において攻占するところとなり、欣快に堪えず。（中略）戦局の全般は我に有利に進展しつつあるも、前途なお遠遠なり。（中略）諸子はビルマの日本軍を模範とせよ。拉孟において、騰越において、ミートキーナにおいて、日本軍の発揚せる忠勇と猛闘を省みれば、我が軍の及ばざること甚だ遠し」

むすび

私はこの拉孟の戦いを調べるにつけ、金光隊長ならびに守備隊の将兵各位が一糸乱れず、何のためにそこまで戦ったのであろうかと自問する事しばしばである。

彼ら日本将兵の戦った実態を知れば知るほど、それは東亜の平和のため、私たち日

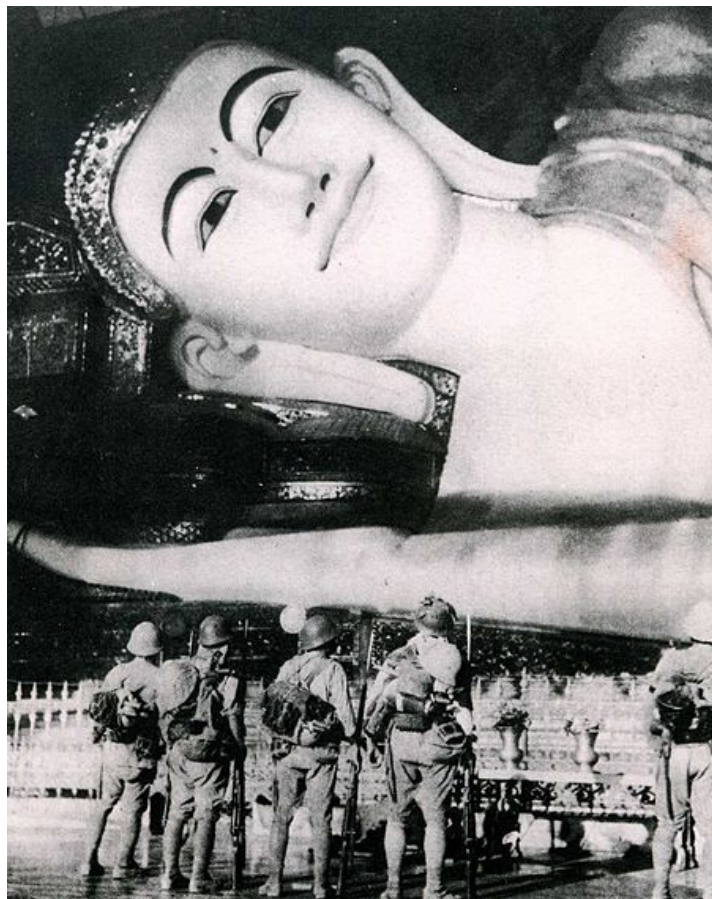
本人を守るためではなかったかと確信するに至った。

そして日本将兵各位が精神的なよりどころにされたのが、我が国古来からの倫理観であった【日本人の倫理観（精神）「名こそ惜しけれ」「公に奉ずる」】ではなかったかと思っている次第である。

冒頭に述べているように2012年頃から我が国の官民を問わず、多くの人々がミャンマーを訪れるようになった。

しかし、遠く雲南の果ての拉孟で数多い我が国将兵各位が未だ帰還せず、この地に眠っている。我々は彼らに対して感謝もせず、慰霊もせず、ただ忘れるばかりの日本人であって良いのだろうか。

戦争は我々人類が全力を挙げて忌避すべき事件である。この事は忘れてはならない。



ビルマ寺院パトロール中の日本兵

しかし、読者の方々も御存知の通り、明治以降、多くの我が国の将兵各位及び邦人の方々が国の命じるところにより、戦いなどにより外地に眠っている。我々はそれらを忘却の彼方に葬ったり、将来に生かすことなく、単なる自虐的な史実と解してはならないと思う。

それでは、彼ら我が国の将兵各位たちは、何のために身を犠牲にして戦ったかと草葉の陰で嘆き悲しんでおられるであろう。

我々は彼らが歩んできた航跡（歴史）の事実を知り、彼らの遺業に感謝すると共に我々が今後進むべき道標にすべきではなかろうかと思う。

第二次大戦は確かに、我が国はアジア諸国を中心にして、その惨禍を被らせたことにお詫びと反省をしなければならない。二度と我々日本人は過ちを犯してはならないことを肝に銘じ、今後の我が国の若人に申し伝えねばならない。

しかし、自虐的な書物及び報道によって第二次大戦に対して日本が果たした世界史的な役割及び民族の誇りも、また見失ってはならない。

私は、我が国の外交方針である平和共存及び法の支配を前提にして、いま、この旗を建てるため、我々日本人が今までにいかなる働きをしたかを聞かされるならば、我が民族は必ずや、再び、失われた自信を取戻し、胸を張って、新しい人類の理想のために前進するのではないかと思う次第である。

-----戦死した一兵士の遺書（菊と龍 相良俊輔氏著書より）-----

もし玉碎して、そのことによって、祖国の人達が、少しでも、生を楽しむことが出来れば、祖国の国威が、少しでも強く輝くことができればと切に祈るのみである。

遠い祖国の若き男よ、強く逞しく、朗らかであれ、
懐かしい遠い祖国の若き乙女たちよ、清く美しく、健康であれ。

2016年4月17日

高松重信

参考文献

相良俊輔著『菊と龍』1-279頁、光人社、1966年6月

野口省己著『回想ビルマ作戦』1-314頁、光人社、2000年1月

司馬遼太郎著『この国のかたち（1）』1-288頁、文春文庫、1993年9月

川北恵造著『烈風』1-314頁、叢文社、1983年1月

筆者略歴

たかまつしげのぶ

高松重信



1942年生まれ。1967年国鉄入社、本社及び松任工場長、吹田工場長などを経て、民間会社の海外鉄道車両関係に従事。台湾に約5年6か月・電車の現地生産・責任者として駐在。

ミャンマーとの関係は1982年国鉄からビルマ国鉄へ派遣、いらい現在に至るまでミャンマー鉄道省運輸省及び同国鉄へ顧問的な指導。鉄道に関する論文発表多数。

元国土交通省ミャンマー鉄道改善WGのメンバー。2022年8月外務大臣表彰受賞。現(一社)日本ミャンマー友好協会(副会長)。現JICAミャンマー鉄道政策&技術顧問。

日緬ライブラリー・パダウ 6

嘗てのビルマ戦線で戦った日本将兵を想う
〈その5〉—知られざる誇り高き拉猛守備隊—

高松重信 著

2025年3月1日 発行

発行者：一般社団法人日本ミャンマー友好協会

〒160-0012

東京都新宿区南元町13-3-504 ライオンズマンション信濃町5F

TEL 03-6380-0409

ISBN 978-4-911475-05-8 C1810

©高松重信 2025